

## 巻頭言

# パパとママのところへいきたい

現代宗教学研究所長 三原正資

「めずらしい、これ、臨死体験をあつかっているのかな？」書評（産経新聞 平成三〇年一月一四日）で心魅かれた綿矢りさんの短編集『意識のリボン』（集英社 二〇一七）。

〈私〉は交通事故によって瀕死の重傷を負った。

「——さん、分かりますか、——さん、聞こえていますか、へんじしてください」

私を呼ばないで。せっかく今、気持ちの良い場所に居るのに。（略）

真っ暗の闇は宇宙より深く、でもどこか親身であたたかい。

これが、死なのだろうか？

闇の中で出会った「ひかり」について〈私〉は思う。

人々を救済する全能の神というよりは、ひかりはもっと身近で、あたたかく、畏敬の念というより、親しみをおぼえた。

うめき声を上げながら、早くひかりに戻りたい、と切望した。(略)

ああ、私にひかりは宿っていたんだ。何もわざわざ天空へ行かなくてもいい、熱くららんと燃えるひかりは、生き物の身体の内でも輝いている。触れないし見えないけど、確かに私の真ん中にある。おびえることはない、救いは遠くにあるのではない、私は生まれたときからずっと所有している。忘れていただけだ。いままでずっと、そっと、助けられていたのに。

昭和五三年（一九七七）のこと、二〇代の最後のとし、故郷の小さな書店で『かいまみた死後の世界』（レイモンド・A・ムーディ・Jr 評論社）を手にした。このときのことを、のちに私は次のように書いた。

ムーディはつぎのように述べている。

わたしは本書において死後の生命の存在を立証するつもりはない。……死後の生命の存在の「立証」が、現在可能だとも思っていない。……

特にお願いしておく。本書に提示した報告を信じられない人は、その人流のやり方で、少しばかり探ってみてほしいと思うだけである。

とは言っても、ムーディ自身、本書の巻頭で「死とは何だろうか？ 地球上に誕生した時からずっと、わたしたちはこの疑問をかかえてきた」と述べているように、真正面から、死の問題に、体験的、実証的に迫ろうとした。この本は、私につよい衝撃を与えた。書店の棚にこの本を発見したときの心のときめいた一瞬の光景を、今でも私はおぼえている。（『宮沢賢治の宇宙』 日蓮宗新聞社 二〇一二）

綿矢さんの『意識のリボン』に描かれた（私）の臨死体験は、ムーディが提示した臨死体験のモデルと似ている。ところで、『意識のリボン』の出版と前後して、『プルーフ・オブ・ヘブン 脳神経外科医が見た死後の世界』（エベン・アレグザンダー ハヤカワ文庫 二〇一八）が書店に並んだ。著者E・アレグザンダーは言う。

私は脳神経外科の医師である。（略）要するに、科学に自分を捧げてきた人間なのである。現代医学という手段によって人々の治療にあたり、脳と人体の仕組みを探索することを自分の天命と考えてきた。（略）

ところが二〇〇八年の十一月一日、五四歳という年齢で、その運が尽きたと思われた。稀有な病気にかかり、七日間にわたる昏睡状態に陥ってしまったのだ。その間は新皮質——人間としての活動を担う機能が備わる、大脳の表面を占める部分——の全体が活動を停止していた。（略）  
脳が存在しなければ、その持ち主もそこにいないことになる。

そして、E・アレグザンダーは、ムーディが語らなかつた領域に踏み込む。

脳や肉体が死んでしまっても意識は消滅せず、人間は死を超えて経験を継続していくことを、私の臨死体験は教えてくれた。

またそのような意識には、個々人とこの宇宙にあるもの全体に目を配り、行方を見守り続ける神の眼差しが注がれているという、さらに大切なことを教えられた。

私<sup>が</sup>これらの本を読んでいるとき、二三回目の一月一七日がきた。その夜、NHK TV「遺児たちのいま」という、阪神・淡路大震災によって両親を失った子どもたちのその後を追ったドキュメンタリー番組をみた。

私は、画面に響きわたる産声とともに「(死んだ) パパとママのところへいきたい……」と叫ぶ女性の声に驚いた。それは大震災で両親と死別した女性が結婚し、女兒を出産した直後に産室で叫んだことばだった。

TVは、突然両親を失い、何不自由ない幸福な家庭が一瞬に崩壊したのち、生きていくために長いあいだ抑圧していた思いが噴き出したのではないかと伝えていた。

そして今、そのとき産まれた女の子は両親のいない自分の母をみて、「親<sup>が</sup>が生きているっていいなあ」と呟く。しかし、その女の子の母は、今なお「パパとママはいつ私を迎えにきてくれるの」と思うときもあるという。

強い悲しみに圧倒された私は、その女性にかけるべきふさわしいことばが見つからなかった。彼女の悲しみが深く私の心に入ってくる。ほんとうは、私たちの心の奥底にも同じ悲しみがひそんでいるかのように。

『ブルーフ・オブ・ヘブン』の解説〈他界の証拠〉で、カール・ベツカー氏（京都大学政策のための科学ユニット特任教授）は「現代の日本人は、臨死体験の存在を知ってはいても、死後に意識が存在するとは信じていない」と評し、次のように語る。

アレグザンダー医師の臨死体験は、じつは日本人にとってこそなじみやすいはずのものであろう。なぜならば、日本人はどの民族よりも震災や火災、津波や洪水など、多くの災害の惨禍を被ってきたからである。それだけの災害を乗り越えるためにも、しっかりと他界観がないと、生きていけないのである。高齢化が進み、今後、毎年百数十万人もの日本人が自然に他界するようになる。このような中で介護や看取りを続けていくためにも、しっかりと他界観を持っている方が、燃え尽きずに介護をやり続けられるのである。

臨死体験は生き方を変えろという。『意識のリボン』の評者・赤羽じゅんこ氏（絵本作家）は、その変化を次のようにまとめている。

肉体を失って振り返ると、他者との競争に勝ったことなどは、ほとんど意味をなさず拭い払われ、それよりもどれだけ人を助け、助けられてきたかを再認識するという（略）

私たちも、あらためて、死生観を問い直し他界観を確認してはどうだろうか。

『意識のリボン』の〈私〉はつぶやく。

ゆこうと思えば、いつでも、彼方へ。